

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 『喫茶養生記』に見える宗教思想
— 道教との関わりを中心に —

氏 名 張 名 揚

論 文 内 容 の 要 旨

栄西（一一四一～一二一五）『喫茶養生記』についての先行研究は数多くあるが、栄西自身、『喫茶養生記』は中国で得られた知見によって著されたものであると強調しているにもかかわらず、『喫茶養生記』と中国思想との関わりを主題とする論著は少ない。本論文は中国思想史（とくに道教思想史）・中国喫茶文化史の視点から、『喫茶養生記』そのものと、『喫茶養生記』が成立する背景に存在した諸思想について検討するものである。

本論文は五章及び附録から成る。

第一章は前半と後半に大きく分かれる。前半部分では栄西という人物について考える。南宋、虞樗の「日本国千光法師祠堂記」と明、如蘭の「洛城東山建仁禪寺開山始祖明庵西公禪師塔銘」という二つの栄西伝を通して、中国で知られていた栄西の事跡について確認するとともに、『隠語集』を取り上げて、『喫茶養生記』以外の著書で栄西の思想の特徴を考察する。

第一章の後半部分は、書物の構造・体裁から、中国思想（神仙道教思想）の受容までを含めて、『喫茶養生記』を全般的に分析する。上巻では、栄西は飲料としての茶の効能を強調している一方、下巻では仙人が嗜む供物としての茶を取り上げて記している。下巻はまた桑に重点を置いて書かれており、宗教性と神仙思想に富んでいる。これは、養生法としての桑の利用は未だ深く浸透していなかったことに関連すると考えられる。栄西が桑のことを『喫茶養生記』で扱う理由としては、諸説あるが、『喫茶養生記』の中に見える記述に限定して考えれば、医学との関わりが無視できない。即ち、茶と桑を配合してはじめて、その優れた薬効が現れるということである。

第二章は食養生と茶の関係について考察した。『喫茶養生記』上巻の記述を分析した

結果、『黄帝内经』・『周礼』「食医」及び本草学の思想が根底にあると考えられる。栄西は唐代になって、本草書に新たに増補された「茗、苦■（■＝木＋茶）」の項目に見える思想ではなく、古く『神農本草経』の段階では既に存在していた「苦菜」の項目に見える記述で『喫茶養生記』上巻を著した可能性が高い。

この章ではまた唐代以前の茶の利用法について考えた。晋の郭璞の『爾雅注』には茶の調理法（羹に入れること）が記されている。古の羹には五行（五味）思想が込められ、苦味を有する羹が存在していた。一方、『喫茶養生記』にも見えるように、古来、本草学は茶の苦味を認めている。以上のことを『爾雅注』・後漢王逸の『楚辞』「招魂」の注、及び清の段玉裁の『説文解字注』に記載された羹に関連する文字の解釈と参照すれば、郭璞が、茶を羹に入れると言ったのは、茶の味を調える役割に關与する可能性が高いことを指摘した。

第三章は、『喫茶養生記』の序文に見える「山谷生之、其地神靈也（山谷、之を生ずれば、其の地、神靈なり）」という記述を手がかりとして、天台山の茶について考察した。天台山は東晋孫綽の「遊天台山賦并序」以来、よく知られるようになったにもかかわらず、その地の茶についての記述が文献資料に見えるのは中唐徐靈府の「天台山記」以降である。それ以前の状況について、『太平御覧』卷八六七「飲食部・茗」に見える天台山に関連する記述を検討し、『新録』・『神異記』・「天台記」に見える「丹邱子」・「瀑布山」・「大茗」・「丹丘」という四つの語が互いに関連し合うことを明らかにした。

第四章では茶と宗教儀礼との関係について考察した。『喫茶養生記』に見える供物としての茶は密教儀礼を意識しながら記した可能性が高い。実際に、唐末以前に成立したとされる密教経典には茶の利用が見え、道教的な色彩が濃い。そこで、『正統道蔵』に収める『北帝七元紫庭延生秘訣』と『太上赤文洞神三籙』という二つの茶の利用を記した道教経典について考察した。この二つの経典はいずれも星辰崇拝の色彩が見えている。そして、両者はともに密教経典と具体的な共通性を有する道経である。『北帝七元紫庭延生秘訣』は『梵天火羅九曜』に附されている「葛仙公礼北斗法」と相似し、『太上赤文洞神三籙』に見える「伍符是行病符」は『七曜星辰別行法』と類似する点があることなどを指摘し、茶が一部の道教儀礼に取り入れられたのは、病を取り除く効能が重視された可能性を明らかにした。

第五章は、六朝時代の道士、陶弘景と茶との関係について考察した。栄西は『喫茶養生記』で、陶弘景撰とされる『新録』の記述を引用し、陶弘景と関わり深い本草書の記載を多く利用している。本章では、陶弘景が活動していた地域の喫茶文化を概観した上で、陶弘景に関連する茶の記述について検討した結果、茶を指す場合、「茗」と

いう字を使うのが陶弘景の撰述における特徴であること、茶に関連する陶弘景撰とされる資料は、いずれも茶の医学的効能に重点を置いて記されたものであることを明らかにした。

本論文は以上の五つの章の後、附録として、中国人によって撰述された「日本国千光法師祠堂記」・「洛城東山建仁禪寺開山始祖明庵西公禪師塔銘」という二つの栄西伝の訳注稿を収めた。「日本国千光法師祠堂記」は短いものであるが、栄西の伝記として最古のものに属し、高い価値を有している。一方、「洛城東山建仁禪寺開山始祖明庵西公禪師塔銘」は明代になって撰述されたものであるが、内容が豊富であるので、栄西の生涯を検討する上で参考になる。ちなみに、両者はともに栄西は天台山の羅漢に茶を献上したことに言及し、当時における茶の宗教的な性格を反映する良い資料ともなる。